

真空エッセイ「詩と神話」

わたしは、四国九州を自転車で横断・半周して宮崎間青島に立ち寄った時に衝撃を受けた 17 歳の時から、突然、詩を書き始めた。

以来、自分の根幹を成しているのが詩だと思って生きてきた。昨年 3 月末に上智大学を定年退職して、いっそうどんどん 17 歳の頃に戻っていった感じがする。そして、この 5 年間で、7 冊も詩集を出してしまったのである（ただし、6 冊目と 7 冊目はこれからであるが……）。

1、『常世の時軸』（思潮社、2018年7月17日刊）*ちなみに、7月17日は、奈良県吉野郡天川村坪ノ内鎮座の天河大辨財天社の例大祭の日でその日に合わせて奉納出版。

2、『夢通分婉』（土曜美術社出版販売、2019年7月17日刊）

3、『狂天働地』（土曜美術社出版販売、2019年9月1日刊）

4、『絶体絶命』（土曜美術社出版販売、2022年5月30日刊）

5、『開』（土曜美術社出版販売、2023年2月2日刊）*天河大辨財天社の特殊神事「鬼の宿」の日に合わせて奉納出版。

6、『悲嘆とケアの神話論—須佐之男と大国主』（春秋社、2023年5月3日刊予定）

7、『いのちの帰趨』（港の人、2023年6月か7月に刊行予定）

なぜ、このようなことになったのか？

じつは、そのことは、わたしの中での「宗教信仰復興」と「宗教信仰の覚醒」と大いに関係がある。

わたしは宗教を構成する基本三要素を、

① 神話（教えを含む）と、儀礼（修業を含む）と、聖地（宗教施設を含む）

の三つだと考えてきたが、その「神話」の根幹が「詩」であるとの思いが日増しに募り、ついに、自分で「神話詩」を書き進めねば取まらなくなったというわけである。それがわたしの中でのもっとも核心的な「宗教信仰復興」であり、「宗教信仰の覚醒」で、その原点が自分のライフヒストリーの中では17歳の春の青島体験だったということになる。

だから、「詩」を書きながら、原点回帰し、かつ自分の中の宗教性を「復興」というか、「賦活」させていると思う。そんな矢先にステージⅣの大腸がん（盲腸癌・上行結腸癌）になって50センチほど上行結腸を切除する手術をして1ヶ月ほど入院していたが、2度にわたる入院と自宅待機の間、上記6の『悲嘆とケアの神話論—須佐之男・大国主』（春秋社）と『いのちの帰趨』（私家版、7月に港の人から出版予定）を、自分でも驚くほどのスピードで、あっという間に書き上げた。

手術後乳糜腹水という合併症になって退院が遅れ、2週間の絶食療法の治療の間、自分を支えていたのは「信仰」というより「詩」である。もちろん、その「詩」はわたしの「信仰」と切り離せないものだが、呼吸するように「信仰」が息吹となるためには「詩」が生れてくる必要があり、それが「絶食」の中での最大の「栄養」となって、わたしを支えてくれたのである。

そして、その絶食療法中の入院生活の間に、第五詩集『開』（土曜美術社出版販売、2023年2月2日刊）が出来上がって、妻が届けてくれた。表紙の対馬の和多都美神社の海中鳥居を目にした途端、どこか、扉が開くのを感じたが、これにより、入院生活がずいぶん楽になった。主治医の木下浩一先生（副院長・外科部長）とチャプレンの宮川裕美子牧師には詩集を献本し、いっとうなってもいいや、という覚悟も生まれた。そして、その後しばらくして退院できたのである。

入院中に出来た3つの詩集、がんが告知する前に書いていた第五詩集『開』と、がん告知後にまとめた第六詩集に当る『悲嘆とケアの神話論』と、第七詩集の『いのちの帰趨』で、わが「神話詩」はひとつの収まりを得て、後は野となれ山となれという「犬も歩けば棒に当たる～捕らぬ狸の皮算用」（=犬棒トラタヌ人生）を生きている。

土曜美術出版

詩集 開

ひらけ

鎌田東二 著



言霊の詩人こと、宗教学者の鎌田東二さんが第5詩集を刊行した。最初の神話詩集を出した2018年から4年半、前作『絶体絶命』から9か月。旺盛な創作意欲は尽きることがない。おそらく魂の内奥から言葉がこんこんと湧き出るのだろう。

編が収録されている。昨年6月から4か月ほどで書き上げたという。序詩の一行目が「ひらけこま」で始まっているように、作者の脳裏に『千一夜物語』の「アリ・ババと40人の盗賊」があることは間違いない。岩の扉を開いた呪文こそが、絶体絶命の状況を突破するキーワード、すなわち「開け」という言葉なのだろう。そこには、鎌田さんの希望と祈りが込められている。

海がやってくる(「開廊」)。開いた先には、どのような風景が広がっているのだろうか。それは「海へ」なのか。では、その「海」とは、いったい何なのか。

次の一節から、作者の力強いメッセージが聞こえてくる。ヘボクは待って

いる。君たちの漂流を。どこに流れ着いてもいいから、とにかく、生きて、生きて、生きていって(「立待岬の行方不明者」)。

この詩集で、もう一点、注目したいのは、第4章「開放譚 スサノヲの叫び」だ。第4詩集では、絶体絶命のなか、大

国主を「癒しの神」救いの神」として、その顕現を祈念した。今回は大國主の父祖スサノヲの生誕からヤマタノオロチを倒し、出雲に落ち着くまでをたどっている。読者には、併せて読んで欲しい。壮大な神話叙事詩である。(A5判・136頁・価2200円) (無)

これまでの詩集は、現実と神話の世界を往還しながら、独特の言葉遊びやイメージを駆使して現代文明や社会の行き詰まり

前作のタイトル『絶体絶命』に如実に表れている。そして、今作のタイトルは『開』の一字。へひらけと読ませる。全体は「開闢」「無底」「鎮魂」

作品の中には「開」の文字が頻繁に登場する。「開く」「開く」「扉を開く」

浄土宗の祖である法然が綴った「一紙小消息」は700字足らずの短い手紙だが、「浄土宗の教え・念仏の信仰について」

前半では、「黒田の聖人」は誰かをこれまでの研究史を踏まえながら探究し、後半では原文と意訳を掲載し、現代人に分

かりやすく説いていく。例えば「諸行の中に念佛をもちあるハ、かのほとけの本願なるかゆへ也」という原文に対して、「数

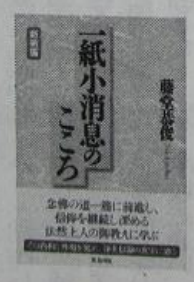
多い佛道修行のなかから、とくに称名念佛の一行を選んで、み名をおとなえするのは、阿弥陀佛の定められた本願の行であるからであります」と訳する。博識な著者によって念仏の教えが現代に蘇る。(四六判・253頁・価2970円)



「開放譚 スサノヲの叫び」の4部構成で、計23

「開く」「開く」「扉を開く」

短によくまとめられて「いると著者(1918〜2000)。「黒田の聖人へつかはす御文」とも呼



とを掲げた。平和学を専攻する清泉女子大学教授の松井ケテ

氏は、リベリア内戦の

キリル総主教は勇氣ある翻意を

WCRP平和大学講座



左上から時計回りに、田辺、竹村、神谷、塩尻、松井各氏

とを掲げた。平和学を専攻する清泉女子大学教授の松井ケテ氏は、リベリア内戦の

スサノヲの
グリーフケア神話

2018年から続いた神話詩5部作の最終作。前作の『絶体絶命』では、兄神たちに迫害され度殺された大國主を、古今東西の宗教・神話の神々を重ねつつ「傷み、悼む神」「聖愛の発露する神」として描いた。今作の第4章「開放譚・スサノヲの叫び」は、トラウマとステイグマを背負ったスサノヲが晴れの心を取り戻すグリーフケアの神話だ。

イザナミは日本列島を産み、山川草木の神々を産み、最後に火の神を産んだことで亡くなった。夫のイザナギは黄泉の国から妻を連れ戻そうとしたが、「姿を見ないで」という妻との約束を破ったために果たせなかつた。スサノヲには、死んだ母への悲愛、母を理解しない父への怒り、自分に疑いの目を向けた姉アマテラスへの絶望が重くのしかかった。「父よ、あなたの愛は独善的である」「おれは母の子だ」。怒りに満ちて暴れに暴れ、田んぼを破壊し、宮殿を汚した。全ての罪穢れを背負わされ、追放された。

流れ着いた出雲の地で対峙したのはかつての自分のような大蛇だった。食い殺し、斬り殺し、叩き殺し、全てを破壊する大蛇を退治し、愛妻と結ばれ、やっど心は晴れた。全ては母の死から始まり、最後に歌が残った。「八雲立つ、出雲八重垣、妻籠みに、八重垣作る、その八重垣を」

定価2200円、土曜美術社出版販売（電話03・5229・0730）刊。



中外日報」2023年4月7日付け

4月12日 鎌田東二拝